

幼児期の文字の読み書きの学びについて



: 絵本の絵を読むことの面白さと
大切さを通して

奈良教育大学教授 横山真貴子

はじめに

みなさんは、『ぐりとぐら』（中川李枝子・大村百合子、福音館書店）の絵本を知っていますか。ご存じの方も多と思います。では、どちらが「ぐり」で、どちらが「ぐら」でしょう？

子どもたちは知っています。文字を読む前の子どもだからこそ、絵を読みます。耳から聞いた言葉と目で見た絵が1つになって、子どもの中に絵本の世界が生まれます。表紙をじっくり見てください。きっとどちらが「ぐり」で、どちらが「ぐら」か分かります。

幼児期の文字教育は「読みたい」「書きたい」意欲を育むことが大切です。文字はあくまで道具です。文字が表すものを見たり、聞いたり、経験してはじめて、その文字を読み書きする意味があります。「薔薇」という漢字を書くことができて、「薔薇」がどんな花か知らなければ役に立たないのです。文字を習得する前の絵を読む時代が大切です。耳から入る言葉と目で見る絵が1つになった豊かな絵本の世界をたっぷり味わった子どもたちだからこそ、絵本を自分で読みたくなるのです。

I. 幼児期の教育における文字の扱い

日本の幼稚園での教育内容や方法は、その大きな枠組みを文部科学省が定めています。それが「幼稚園教育要領」です。

1. 幼児期に求められる「文字」との関わり

「幼稚園教育要領」（2017）では、幼児期の子どもと文字の関わりとして、「日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」こと、そして「文字に対する興味や関心を持ち、文字に対する感覚を豊かにする」ことが重要だとしています。

生活や遊びの中で、文字が何かを表したり、伝えるはたらきをもつことに気づくこと、また文字があると便利で、遊びも楽しくなることを感じて、子ども自身が必要感をもって、生活や遊びの中で文字を使おうとすることが大切にされています。

2. 「文字などで伝える楽しさを味わう」ために

では、子どもたちが「文字などで伝える楽しさを味わう」ためには、どのような点に配慮すればよいのでしょうか。今井和子(2000)は、次の3点を挙げています。

①子どもの生活の中で「読みたい」「書いてみたい」という意欲が育っていること。

人が何かの技術を身につけると、「したい」「やってみよう」というポジティブな感情で取り組む方が、身につけた技術が消えにくいと脳科学の研究が明らかにしています。気持ちが向かないままイヤイヤやらされたことは身につけにくいし、嫌いになってしまうこともあるかもしれません。

②「文字などで伝える楽しさを味わ」えるようになるまでの過程を大切にすること。

「文字の習得は1日にして成らず」です。文字を読んだり書いたりできるようになる道のりは、案外長い。しかし長い人生から見ると、ほんの数分、今の時期だけです。文字の習得を急がず、そのプロセスを楽しみたいと思います。

③「文字などで伝える・・・」という「など」に着目すること。

「など」が重要です。文字に限定していないのです。文字の形になっていない、ニョロニョロの線でもよいのです。「文字（らしきもの）がかけられている！」「お母さんにお手紙書いたら、とっても喜んでくれた！」というように、文字（らしきもの）を書く喜びや、文字（らしきもの）で自分の気持ちが伝わるうれしさを感じる経験が大切です。こうした経験が文字のはたらきや便利さを知り、書きたい意欲を育むのです。

II. 子どもはどのように読み書きを習得するのか？

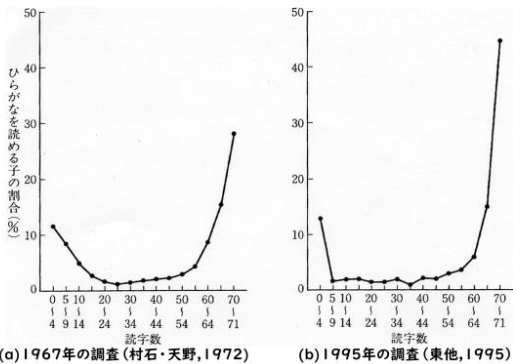
日本の子どもたちは、50年以上前の調査（国立国語研究所, 1972）でも、小学校入学までにほとんどの子どもがひらがなを読んだり、自分の名前をひらがなで書くことができます。

1. 文字学習の特徴

ひらがな（71文字）の読みの調査結果を、縦軸にひらがなを読める子どもの割合（%）、横軸に読字数をとりグラフにすると、U字型になります。つまり、71文字がほとんど読めるレベルと、ほと

んど読めないレベルに分かれます。

■早まる習得時期：1967年と1995年の幼児の読みの調査結果(東他,1995)



1972年と1995年を比べると、1995年の方がほとんど読める子どもが増えています。しかし、形は同じU字型です。この結果から、ひらがなの読みでは中程度の数を読む子は少なく、いったん読めるようになると短期間にほとんどの文字が読めるようになることが分かります。文字に興味をもつと、一気に読めるようになるのです。

では子どもたちは、どのようにして文字を読み書きできるようになるのでしょうか。

2. 生活の中で文字と関わりながら自然に覚える

幼稚園や保育園などで小学校のように組織的な文字指導をしているところは1割程度に過ぎず、保護者の多くも文字環境は用意しても、系統的な学習はさせていないことが知られています。

日本では、子どもの身の回りには文字があふれ、子どもたちは文字を使って生活している大人の姿を繰り返し目にしています。さまざまな標識や看板には文字が書かれており、文字が読めると便利なことも経験します。また読み書きできるようになると、ほめてもらえます。

このように、日本では読み書きが高く価値づけられ、子どもたちが文字に興味を持ち、文字の学習が容易になるように仕向けられていると言えます。こうした文化の中で、子どもたちは生活の中で文字に関わる活動を目にしたり、自ら参加しながら、自然に文字を覚えていきます。

3. 読み書きの習得を支える音韻意識

ただし文字の習得には、音に対する意識が十分に育っていることが前提となります。私たちが聞いたり話したりする言葉は、物理的には連続音です。その連続音を文字に置き換えるためには、音

を文字の単位に分け、対応させることが必要になります。これを音韻意識と言います。例えば「エホン」という語を「エ/ホ/ン」と分解したり、「エホン」の真ん中の音は「ホ」だと取り出すことが必要になります。

4. 遊びの中で音韻意識を育む

遊びの中には、音韻意識を促すものが多くあります。そのよい例が「しりとり」です。しりとりは単語の最後の音を取り出し、その音を頭にもつ単語をつなぐ遊びです。「リンゴ」を「リ/ン/ゴ」と3つの音に分け、最後の音の「ゴ」を抜き出し、「ゴ」で始まる語を答えます。

遊びのよいところは、十分に音韻意識を身につけていなくても参加できることです。「リンゴ」の次は「ゴ」から始まる単語ですが、分からなくても「黒くて、小さくて、粒々の食べ物」などと年上の子どもや大人にヒントを出してもらい参加することができます。このように、子どもたちは遊びに参加しながら音韻意識を身につけ、文字習得の基礎を養っていきます。

5. 文字習得の性差・個人差

自然に覚えるものは個人差が大きいものですが、文字習得にも性差や個人差が見られます。読み書きともに男児よりも女児の方が習得が速いことや、幼い時から文字に興味を持つ立ち上がりの速い子どもと遅い子どもがいることが指摘されています。

しかし小学校入学後、夏休み明けの1年生の9月には、多くの場合、差が縮まることが示されています。小学校に入り、組織的な文字教育が始まると、文字への興味・関心や文字習得の必要感がぐっと高まり、子どもたちは「字を上手に書けるようになりたい」と文字習得に向かうのです。

Ⅲ. 読み書きの習得を支える援助とは？

幼児期の文字習得を支えるために、私たちはどのような援助をすればよいのでしょうか？

1. 幼児期の文字指導の効果

子どもの興味や関心を無視した一斉に教え込む文字教育は効果がないことが明らかになっていきます(三神, 2003)。ある研究では、「3歳入園時にテストを実施し、4歳児10月頃からワークブックの使用、ノートに一斉に一字ずつの練習開始、5歳児になると算数も増え一斉に宿題も出て、各学

期の終了時には評価表が親に渡されるといった園」と、「絵本などの環境を整えながら子どもの興味や関心に応じて文字を教えていく園」を比較すると、読書レディネス・テスト（①お話を聞く、②絵本を読む、③文字を理解するといった読書開始を支える能力のテスト）の結果は、3，4歳児では文字指導を受けた子どもたちの方が高かったものの、5歳児では逆転し、特に受けていない園の子どもの方が高くなっていました。

2. 幼児期の文字教育のあり方

幼児期の文字学習は外から強制されるものではありません。言葉は、伝えたい人がいて、伝えたい経験があってはじめて生まれます。保護者や先生との間の信頼関係を基盤に、友達との関係が広がります。「この人に伝えたい」、そう思える人の存在が不可欠です。また、伝えたいような経験も重要です。夏休みの課題の読書感想文が多くの人のにとって苦痛であるように、伝えたい内容がないのに話したり書いたりするのは、子どもにとっても苦痛です。幼児期は、思いっきり、心と体を動かし、楽しいこと、うれしいこと、伝えたいような経験をたくさんすることが大切です。

大好きな人がいて、伝えたい経験を豊かにしてきた子どもは、文字に興味を持つと、U字型のグラフにあったように、あつという間に読めるようになります。ニョロニョロの線を「文字が書けた！」と喜ぶのは、文字を書く喜びを知り、文字が書けるとよいことがあると、文字のはたらきに気づき始めた証拠です。鏡文字も本人が反対に書いていると気づくまでは、正せないものです。

正しく、きれいに書くことを急がずに、「文字(らしきもの)が書ける」喜びと、文字で人とつながるうれしさを子どもたちに存分に味わわせてあげたいと思います。文字の有用性が分かり、必要感が生まれれば、子どもは自ら文字を習得していきます。そして、文字にならない文字で、思いを伝えようとする、この時期限定の子どもの愛おしさを、私たちも大人も味わえたらと思います。

最後に、とはいえ、なかなか文字に興味に向かない元気な子どもたちのために、**文字への興味を誘う「あいうえお」絵本**を紹介します。子どもたちと一緒に遊んでください。

・『ひともじえほん』(こんどう りょうへいさく)

福音館書店

- ・『あっちゃん あがつく たべものあいうえお』
(さいとう しのぶさく) リーブル
- ・『でんしゃのあいうえお』 交通新聞社
- ・『あからん』(西村 繁男) 福音館書店
- ・『あいうえおの本』(安野 光雅) 福音館書店

引用・参考文献

- 今井和子 (2000) 「表現する楽しさを育てる保育実践・言葉と文字の教育」 小学館
- 国立国語研究所 (1972) 「幼児の読み書き能力」 東京書籍
- 三神廣子 (2003) 「本が好きな子に育つために：文字の習得と読書への準備」 萌文書林
- 文部科学省 (2017) 「幼稚園教育要領」

